電子複写不可

複製史料

南諸島住民の神観戦記

宮城江

防衛研修所戦史室

沖縄 235

133

住民の沖縄戦記

伊江島
座間味
渡嘉敷
久米島

慶良間島

座間味村及び渡嘉敷村戦況報告書

コクヨ 343

座間味戦記

梅沢少佐（隊長）の率いる約千五百名の日本陸軍部隊が始めて座間味村に来座間味に本部を設置して離島の阿嘉島及慶留間島と各部落に駐屯したのが昭和十九年九月十日であった。

戦況の進展に伴い今迄住民の胸にかすかにしかなかった最前戦基地化が軍の進駐に依って実証されて覚悟を新たにし具に勝利を確信し全住民挙って軍に協力し又最後まで行動を共にする事を誓い合ったのである。そして其の日最早連婦人会は軍将兵の接待を受持、青年団員は荷降作業に必要な担棒を切出した山入りをなし、夜を徹しての作業を敢行払暁鶏鳴を聞きドラ部落民の心は非常に張切っていた。

翌十一日より将兵の荷降作業が始り村内の若人達は一人残らず軍に協力作業完遂に邁進した。

九月二十日迄に漸く民家に将兵の宿舎割当も完了した。愈々将兵は陣地の構築、防空壕の構築及弾薬倉庫の建設に着手又住民は軍民用の食糧生産に懸命の努力を払い以後これが毎日の日課であったが住民は超重労働も物かわ必勝を信じきっている住民には苦痛を感じるどころか却ってほのぼのとした感懐さえあったようである。

十月十日今日は軍進駐後一ヶ月目の日である、何時もの様に軍民作業に取り掛ったが十時頃より阿嘉島辺りで盛に飛行機が低空し機銃の音が聞えだした。

民衆は敵機の来襲と思込み避難方を軍に申出たるも軍の方では「今日は日本軍の演習だから心配は要らない、

から安心して作業を続行せよ」と却って叱られたがそれでも住民の心は一向落着かず常に不安な気持である。

午后一時頃沖縄本島から避難して来た船舶に攻撃が加えられて始めて敵の襲撃を軍の方でも認識すると共に警報が発せられ軍民始めて敵の襲撃に驚ぎ出したが其の日は空襲に於ける被害は港内碇泊の船舶のみに加えられ陸上には何の被害もなかった。

翌日より相変ず軍民共防備の仕事に着く。十月十日以来全く其の姿を見せなかった敵機が本月一月二十二日午前八時頃より突然姿を現わし前回と全く同様に港内碇船の船舶だけに攻撃を加えて五、六隻の船舶が炎上してきたく間に水中に沒してしまった。

陸上には何の被害も無かった。

三月二十三日今日も一月二十二日と同様短時間の空襲があり被害は船舶一隻撃破されたのみであった。

当時軍は離島苦のため食糧に懸念して食糧増産を企画し男女青年団並に住民学校高等科生の協力を求めて未開地の開拓のため俗称「マチヤン」に行き作業開始後約一時間にして突如頭上を小型機（グラマン）四機が通り過ぎ暫くして隣村の渡嘉敷島に爆弾が落下されて始めて敵襲を覚知した。そして見上げた空には無数の機影を発見した。おびただしい其の数に青年団並びに生徒達は只茫然と立ち尽すのみであって我に帰って見れば座間味部落方面からは赤黒い如何にも気味悪い煙が大きなかたまりとなって大空高く舞昇って行く途端に全身の力が抜けて頭がふら〳〵となってめまいを感じた者も数知れずいた。あゝ未年住み馴れた我村は

我家は又家族はと其の安否を気遣うだけで其の場から動く事すら出来なかったと言う青年団及び生徒等の心情が察しられて断腸の思いがするのであった。生命の危険は暫くは毛頭考えられない。

其の内に部落全体を破壊し尽しにかかる敵機は今度は周辺の山々に攻撃を加へ始めた。最初に「ガソリン」を撒き散らして其の上に焼夷弾を来たから堪らない。忽ちにして山全体が火の海と化して仕舞った轟々たる火の燃える音、爆発の音が入り乱れて何とも形容する事が出来ず又我を忘れて見入る許りであった。愈々周囲の山々が炎々と燃え盛る頃になって始めて身の危険を感じ慌て、深い谷間に難を避けたが極度の絶望感と一人として口をきく者もない。深い物思いに時の経つも全く解らない。其の間猛撃を繰り返した敵は一機去り二機去りついに夕刻迄には全機引揚げてしまった。一刻も早く部落の被害の状況を知り度く速る心を押さへ谷間を飛び出し皆帰途に着く。

作業隊は家族を案じて途中坂道を駈足で急ぎ、家族は又作業隊を案じて迎えに来る。出会してお互に無事を喜んだ。こちらは部落の事を聞き、家族はこちらのことを聞きお互に尋ね度き事をがまんして一刻も早く村全体の状況が知りたくて急坂を大急ぎ峠迄来て見ればまた何とした事そ、兼ねて覚悟はして居たとは言え今目のあたり見る所の村が村の有様はこれが今朝まで各戸とも石垣で囲まれ整然として、た我が村なのか。山麓近くの学校は屋根も軒も皆崩れ落ちて炎々と燃えて居る、村中は殆どの石垣が四散し家は全壊炎上、大破、中破其の被害たるや全滅

其の通りである。泣いても泣けぬこの惨状に皆が失神状態になり乍らも漸く各自の屋敷に帰った。住むに家なく全住民は其の日から早速防空壕住いである。不幸にも当日住民二十三人の死者を出し傷を受けた人の数も相当あった。幸いにして農耕地域の被害の皆無は天祐か、壕生活に入っても食物は大丈夫確保出来た。

二月二十四日土の臭も鼻をつく壕で一晩を過して目を覚す頃には既に敵機の来襲である、部落内の残った家々に対し又各所に設けられた単施設に対し物凄い攻撃を加えて居る。飛行機の数も昨日に劣らない。

一体友軍機は何をしているのだろう。敵はこちらの無抵抗に対して存分に悠々と親猫が小鼠を弄ぶ様に何んの不安もなく爆弾投下、機銃掃射と歯をくいしばるほどである。

其の頃から口にこそ出さねど誰もが今度の戦争は敗けるのではないかと思っていたのであろう。心待ちに待った友軍機は遂に姿を見せずおまけに夕刻からは艦砲射撃までが加えて来たからたまらない。あゝ日本もこれで終りか、もしも此の戦争で敗けたら何時もうわさに聞かされた「婦女子は其の身を汚し後に刺殺され男子は道に並べられてローラーの下敷にして仕舞う」と云う通りとなるのではないかと夜も眠る所の騒ぎではない。あれを思いこれを考へたらどんな事があっても勝抜いて貰わねば否勝抜かねばならん。必ず勝つ様に協力し努力しようとは婦女子でも心に誓わずには居られないのであったろう。

今日は昼夜を徹しての艦砲射撃の連続であった。恐怖の一夜を明かした今日二十五日も朝から艦砲と空からの攻撃に一刻も壕を去る事が出来ない。山に河に谷に砲弾、爆弾

の炸烈する音は耳をつんざく程である。人の話では相当数の艦船が港内に来ていると言う事を聞かされ何とも言へぬ感に背筋が冷くなった。夕刻に至って梅沢部隊長よりの命に依って住民は男女を問わず若き者は全員軍の戰手に参加して最後まで戰い、又老人、子供は全員村の忠魂碑の前に拾って玉砕する様にとの事であった。命令を受けた住民は揃って指定の場所に集って来た。皆盛装に着替えて居る。

其の時部隊長及び村長が現場に現われるのが一足早かったら全住民は自滅を完全に遂行したかも知うない。幸か不幸か敵艦から発せられた一弾が忠魂碑に命中したので死は覚悟していたもの一人が逃げ始めたので全員が四散して仕まった。壊た帰る者、山に逃げる者、思い々々の方向に走り去ってしまったのである。そして若き者は殆んど軍の所に走って行動を共にした

三月二十六日朝敵弾の中をくぐって小高い場所に登って見渡したら更に失望落膽させられたのは今目の前に繰り広げられた有様は島の周囲は全部敵艦艇で十重、二十重に取巻かれて居るではないか。其の数のおびただしさと言うたら四、五哩も離れた各小島迄足もぬらさずに渡れる位だ。今にも物凄い数の敵兵が上陸して来る様で生きている気持はみじんもない。

午前十時頃から愈々敵才では上陸を開始した。其の援護攻撃で陸上は正に弾丸の雨である。

部落に於て之に応戰していた日本軍も遂に抗する事が出来ず俗称「高月山」迄後退の止むなきに至った。午后になって全軍番所山に集合、命令が発せられて最後の抗戰場所と定められた。そして各配置が決定されて上陸軍を此処で遮断すべく待ち受ける事になったが夜になっても敵は山に登って来る

気配がない。
しかし部落内には既に敵兵が蝟集して、るが斥候の報告依て今夜中は絶対に山頂まで来る事は出来ないと知った友軍は三、三、五、五と木の下、草むら等に集つてお互に郷土の話や、身の上話、写真の見合せ等明日なき命を忘れて皆最後の挨別をお互でやつている様は傍で見て、同じ運命におかれている身たうこを忘れて涙ぐましく思われた。
日が暮れて頭上には四七、八日の頃の月が雲の合間から顔をのぞかせたりして何んとなく寂寥の感を一層深くした。
其の頃部隊長の命により斬込隊が組織され愈々今夜敢行することになった。
其の命を受けた小峯つる子外四名の女子青年団員に対し出発間際に内藤中尉より雑嚢五個と手榴弾が渡されて

「今夜の斬込で生存者は「相崎山」に集合するからお前達は此の弾薬を指定の場所迄運ぶ様にせよ」と言われ時刻を同じくして五名は目的の地に向つた。運よくば再会を堅く約して右残りを惜しみつ、別れていった。
部隊と分れた五名には弾薬箱の重さと来たら普通の場合で五分間持つて居る事すら出来ない位だが「バンド」は肩に食い込む。道は山下の落葉に足をさらわれ、山を合け谷をよじ登り明方の四時頃遂に目的地迄辿り着く事が出来たが僅かながら「線香」の望みを期待して居た将兵の帰還は夢にも見えなかった。
それでもまだ諦めるのは早いと夜明けまで待つ事にしたが、待ても待ても遂に姿を見せた者は一人もない。最早全員玉砕したものと諦め彼等五名も敵に辱かしめを受けて殺されるより

か自分自身で死んだ方がよいと協議一決した。辺りを見廻しても人影一人もいない、此の山中に生きて居るのは此の五名の外はいない、と思った。事実其の日は住民も各所に拾りて自決を図って種々様々の惨事がくりひろげられ自決者七五名を出したのである。その惨憺たる有様は実に目を覆うものがあり、役所三役の自決も当日であった。

一方住民の大半は島の西北端にある俗称「ヌンルガマー」の自然壕をたよりに或は失心せんとする意識を取り戻しつゝ集って行った。

又一つの頼みとするこの壕は入口をアダン葉に覆われて奥行きが八十米程もあって海岸にあるため満潮時には到達する事が出来ぬ壕で敵艦からはわずかにアダン葉によってかくされている程度のものだが之が住民の頼みとする唯一の壕であった既にそこ

これは三百有余人の住民がぎっーりとつめ込まれていた。そして物音一つたゝず不気味な空気が壕内をつゝみ恐怖に堪えつゝ人々、絞目もわからぬいとし子の口に手拭を押しあてる親、或は生米をかじっている子供すべて敵の察知を恐れて物音一つだに立てず又時々ため息が聞えるだけである。そして此の壕には水がなく皆着のみ着のまゝで食糧の持参もなく、昼は敵の看視がきびしく、わずかに暗夜の干潮時に辛うじて壕をとび出して水を求め食糧を探す程度のものであった、中には小便を立ちながらすゝり渇きをしのぐ者も居た。

日が経つにつれて飢餓に追われ、泣きわめく我が子に手拭を口に押しあて、泣き声を止め、又声を出す者は皆ためらわず殺すべき事を決心せり、

しめ殺すとの事までも互に決められていた。然こ戰爭は益々
熾烈になり食糧は食い つくし今は只死以外に選ぶ方途は
無くなった。其の窮狀を見兼ねて一住民大城松三氏は
自ら申し出て三百人の食糧を補給するため散彈をくぐって
壕を脱出した。住民は唯彼の帰るのを今か今かと待ちわび
つゝ二、三日を経過した。其の間全部は殆ど飢餓狀態に
なって口にするものは何一つとしてなく、脱出後四日目に彼は
やっと帰って来たが食糧はといえば芋一つさえ持参せず反
って散彈のために重傷を受けてまもなく息を引き取ったので
ある。其の時から壕内では食糧もなく、乳呑み子を持つ母
親は乳が出ず、子供は大声にて泣きわめく、泣けば皆で死
なせと言う。親子の愛情も一時にして消えうせてしまう有様
で壕内では漸く騒動し始めた。そして脱出する者も居り、

他は栄養失調で気力を失った者ばかりであった。
敵上陸当時「大和馬」の壕に居た仲村渠一家外二、三の家
族は米軍の上陸を知って自決を計り校文仲村渠眞行
が友軍の軍刀を借りて来て家族全員を刺殺した悲惨事も
あった。
又「内ノ山」の壕にては米軍の道案に依って、あわてふためいた住
民に対し村長野村正次郎、收入役宮平正次郎の両氏は
専ら慰撫激励に当り、助役宮里盛秀氏(兵事主任
兼分会長)は軍から渡された旧式三八式銃にて米軍の一人を
射殺して自決したのである。一方米軍は益々山頂迄進出し
たので住民は今は施すべき術もなく遂に意を決して全員
五十七名天皇陛下万才を三唱して各自持参せる毒薬
(アヒサン)小刀、カミソリの刃、手榴彈で千名一時頃自決を

決行したのである。
其の他住民百五十五名程も自決した。これは敵上陸進攻の際は男女を問わず生きているものは潔く自決せよとの隊長命令に従順に従ったのである。
他方慶留間島防衛に当る(大下隊)約一ケ中隊の海上特幹隊。。其は米軍の急進攻に依って不意をつかれて一隻も進攻を未だに敵軍を目前として上陸をゆるしたのである。そして部落民と共に部落後方の山頂に陣取って最後の交戦を決行した。其の時部落民は皇国に殉ずるの覚悟を以て自決を決行せる者四十五名、戦死者六名を出した。
又阿嘉島には古賀少佐の率いる九。。名の設営隊と野田少佐の率いる特幹隊四。。名が駐屯していたが戦況の悪化に伴い、三月八日付沖縄特隊司令官の命に依って十八才以上六十才以下の男子と屋嘉比、久場島、内鉱山の鉱夫と阿嘉国民学校高等科生及び青年義勇軍四。名計一二。名は阿嘉島防衛隊として野田部隊に編入せられ約三週間の猛訓を実施された。
三月二十日敵機の来襲に依って昼夜の別なく連続爆撃を受けて山林部落各所に発火軍民協力消火に尽力した。
明けて二十二日は軍食糧倉庫に発火軍は抗戦しつつ之が消火及食糧品確保に努力し又住民は一切の私情を捨て、軍に協力した。
二十二日午前三時食糧確保作業中阿嘉島最高の嶽原山に敵グラマン機来襲猛烈な爆撃が展開された。
茲に於て最高幹部連は上陸の兆の氷ありと発表し軍は各方面要所に監視哨を配置し敵の上陸に対処したるも敵機の空襲尚熾烈にして軍民の活動殆んど不可能の状態に陥り

漸く午前十一時非常食の配給あり。
午前十一時四〇分部落西方（比津志方面）の監視哨より敵艦発見の報あり。続いて同哨より移動部隊ならんと知り間もなく上陸準備の企図を有する旨報告さる。
野田隊長は全員山頂に後退すべしと命を下す。午后一時敵は爆裏と艦砲を以って猛烈な攻撃を加へ来る。彼我攻防戦愈々熾烈となり敵は部落前方海岸に上陸、激戦は愈々極度に達した。友軍は其の対策を講じて無線機を山頂各所に設置して沖縄本島との連絡を密にするも敵の電波深知機によって無電機の位置が発見され敵の艦砲爆撃が無線機の位置に集中し遂に阿嘉島玉砕を決意して紅出陣の打電を最後に無線機を自隊にて破壊し連絡不可能となる。
一方特幹隊では二十四日小学生を含む斬込隊が編成され出動準備完了し隊長訓示の後最後の乾杯をなす。
二十四日二十三時我が防衛隊は慶留間海峡に航行磁船する大小の艦船約数百隻の中を（某火能）を連絡のための渡嘉敷に刳舟二隻にて護送する途中敵の猛火をあびるも無事目的を達成し帰島した。
二十五日午前編成された各斬込隊は防衛隊の道案内にて又特幹隊は目的の海岸に、整備中隊は阿嘉部落に点在する各所の敵に斬込を敢行した、斬込隊は連よく敵陣中に進撃し不意をうたれた敵は約四時間に亘り激戦が展開されこの激戦に乗じて特幹隊の一中隊二中隊は舟艇に乗込み出陣の好機を把握すべく努力したるも恰も月夜にて高度に照り輝き其の上熾烈なる敵艦砲及び空爆によって容易に其の機を掴め得ず其のまゝ待機の状態を持続し特幹隊

の三中隊は慶留間島阿嘉表に渡泳して各舟艇に乗り込み敵艦戦向け出撃を敢行した。

又整備中隊は部落方面の斬込に成功し敵に多大の物的、人的精神的損害を加え更に海岸線の次回作戦を企図して行動開始中惜しくも敵の敷設せる地雷に依って殆んど全滅の悲哀を満喫した。尚ほ残存せる数名の兵士は目下敵に殴り込みを敢行戦死した。

特幹隊の斬込隊も各半数位帰隊せるも其の戦果は予想外であった。

二十五日二十三時生存せる兵士によって第二回目の斬込隊を編成して海岸線附近に抵抗線を張る敵に再び斬込みを敢行猛烈な激戦を展開し、敵は漸次敗退抗戦不能の状態となり艦船に退却せしめ尽大なる戦果を挙げた。

明けて二十六日午前十時残存せる兵士中約五十名を以って小部隊を編成して嶽原山に於いて更に抗戦準備中不意に上陸せる黒人軍二百名からなる敵と交戦し白兵戦を演じての激戦一時間後裏退せるも其の間我軍の損害多大にして戦死者多数となった。

一般住民は部落最高の大山嶽の松山や谷間に避難したが米軍上陸以来我が戦況が日毎に悪化し玉砕の最後が予期せられたので軍から又沿道の非常用手榴弾に依って悲壮なる自決が決意されて一家若しくは親族一固りとなり涙の中に今後の行動を語り合い、或は自決の方法等が論議され殆んどが自決に決定、毎日涙の中に死が決行されていた。

ところが手榴弾一個では一家一族全員の自決は望むべくもなく否却って死どころか傷ついて苦しむ有様であった、更に降り

コクヨ. 243

続く雨天の為不発弾が多く住民の唯一の望みをかなえてくれなかった、時に再び軍への協力方が高度に要求されたので無法な自決を避け死力を尽して軍に協力した、即ち軍と同生共死其の行動を一にし男女老幼を問わず「一人一殺」の言葉を厳守して戦闘に参加した米軍上陸の日神風特攻隊の悲壮な活躍ぶりを見た、即ち台湾より飛行せる神風特攻隊は慶良間海峡又は阿嘉島周囲を取巻く敵艦船に対し午前八時頃より晩にかけて毎日の如く花々しい戦果を挙げ、一機を以って最少三隻以上を轟沈した、これは爆弾投下により最後は体当りにより敢行された。

我々はこの状況を眼前にせる時神風特攻隊の精神の尊さとこれに続くべき魂が心底から全身にあふれる位だった。

特攻隊来襲に敵は空襲警報を発し慶良間海峡一面に煙幕を張る、これを好機として軍民は高所に立り神風特攻の成功を祈りその戦果の見事さに我を忘れる事がまなく為に敵弾に当って多数の負傷者を出した位であった、就中阿嘉海岸に漂流せる有賀航空上等兵曹（戦死）の抗戦の見事ぶりは全員涙をのんだ。

これは敵艦三隻を轟沈した後戦死したのである。

我軍は四月二十九日天長節を期して神風特攻隊と共に最後の斬込みを作戦せるも生憎神風特攻隊来襲せず期待なく我も作戦を控えた有様であった。

次後我が軍は食糧漸次窮乏の状態となり民に対し「芋や野菜一つたりとも一切軍の許可を受けずして採取するものは銃殺する」の命を発し谷間の水さえ自由に飲めず次第に栄養不良となり年寄り子供が次々と倒れる数が増して来た、

其の上生存防衛隊によって民間避難場所内に於いて犠牲
者を造る作業迄実施された、
兵士も雑嚢などに米粒などを発見されると十日間の絶食又
は銃殺という厳命だった。兵士が一日一食中一株のヤマブキ
を食って生を継いだ。
そして遂反者三十名が銃殺された。
右の様な食糧事情による軍の厳四割策は極度に達し兵士の苦
しみはさておいて一般住民の苦しみは言語に絶する程であった。
水さえ自由に飲めず軍への協力によって疲労し切った体を養
う何ものもない人々、苦労と栄養不足による衰弱に死んで行く
者は日増に多く実に悲惨であった。だが住民はこれが滅私奉
公であると思い見る目も痛ましい光景の中で骨と皮ばかり
になって軍に協力した。

時に米軍は難攻不落の阿嘉島を降伏させるべく色々の手
段が用いられ、宣伝機等強力に実施したるも我が軍民はそ
れに迷うことなく自戒に鞭打ちつつ軍民一体食糧の解決増
産に努力した。
六月十五日海岸方面に於ける水沼軍曹の率いる作業人が
敵宣伝軍に包囲され、該軍曹は米軍に捕えられたが、間もなく
帰島させられて「六月二十五日迄に降伏するや否や」の敵の要求を
野田隊長宛に連絡した。然し野田隊長は六月二十五日午前
十一時全員集合を命じ最後の訓辞を行った。即ち「降伏
せず」との訓辞であった。
八月十六日大本営発表に「日本天皇は無条件降伏せり」と
あるから、これからは弾丸一発も打たないから早く山から降りて来
いとの宣伝と敵グラマン機による宣伝ビラが撒かれた。

我が軍はそれを信用せず八月二十日敵将校三名が水泳着のまゝ我が本部に上陸、終戦の情報を発表したが野田部隊長は之を信ぜず断乎として降伏せざる旨厳達す。更に米軍将校は野田部隊長に渡加島に生存する日本軍は無線機を所持せる故明日同島に渡りその真実を確めよとの話合いになり翌日ミノキ中尉、水沼軍曹をして米艦より渡加島に渡り生存日本軍より終戦の真実を確保した。依りて八月二十三日遂に涙を以て降伏した。

（中略）

コクヨ 243

渡嘉敷島における戦争の様相

この記録は米軍上陸から米軍降伏までの沖縄戦の一端渡嘉敷島の一部を記録しましたが本島と切離された孤島の戦線は幾多様相を異にするものが多々あった。

当時村長古波蔵惟好氏、役所吏員防衛隊長屋比久孟祥（現生存者）等の記憶を辿って其の概要を纏めたものでありますが過去を省みて如何に戦争が罪悪であるかを吾々は実際に体験し、そして今後幾多反省すべきことがあるかを痛感した。将来に再度この様な事を繰返すことのないよう永遠に平和を愛好し人類の幸福と繁栄を自由の中に樹立して行くよう願って止まない。

昭和十九年九月二日七十屯級の汽船が慶良間海峡、阿佐港外に停泊していた。その船を目標に友軍戦斗機が三機編

隊で毎日急降下演習が続けられている。

この汽船は兵器弾薬を南方へ輸送するものと住民は想像していた。

今九月七日沖縄憲兵隊某軍曹が突然来島した。用件は渡嘉敷の漁船を軍需部の漁撈班に徴用の目的であった。

鮫漁船、嘉豊丸、源三丸、神祐丸、信勝丸の四隻は乗組員一三〇名と共に九月八日午前四時を期して阿波連港へ集結を命ぜられ同日午前十時那覇港へ出港した。

翌日を出でずして村営航路嘉進丸も軍需運搬の目的で徴用され、那覇、久米島間の輸送任務についた。軍は秘密保持のため移動性のある船舶の慶良間各港の出入を堅く禁じていた。

今九月九日午前八時頃一方行きと思われた汽船から渡嘉志久に小型舟艇が近ずいて来た。驚いたことには武装した陸軍の

コクヨ 243

兵隊が上陸して来たからである。或る兵に尋ねたら渡嘉敷に駐屯するとのことである。部隊は鈴木部隊で兵員一千名。基地隊と呼ばれた。

鈴木部隊は渡嘉敷に上陸を完了し渡嘉敷部落への道した、村国防婦人會は部隊歓迎のため総動員で湯茶の接待をし軍の慰労に努めた。兵員の中には長途の輸送で疲労した為か千痢患者を続出する有様であった。

部隊の宿舎には住民の住家があてがわれ、村民は部隊長、鈴木少佐の要請により男子十六才から六〇才まで、女子十六才から六〇才までが部隊に協力、九月十日から陣地構築作業に従事した。

今九月二十日特攻船船隊と稱する部隊が赤松大尉を隊長とし兵員一三〇名と舟艇百隻をもって来島渡嘉敷に

阿波連に駐屯し日夜猛烈な攻撃演習が松宏裡に行われていた。

数日後徴用された漁船は漁業の根據地を渡嘉敷港に変更された為、全漁船帰港、連日雌漁業に従事軍需獲得に従事した。今十月十日那覇上空は爆音と共に平素と異った様子が見られた。時には高射砲の弾雲も見受けられるので鈴木部隊本部に問い合わすと友軍の対空射撃演習だとのことで村民は安心して何時もの通り陣地作業へついた。

漁船班にあっても嘉豊丸は出漁し、源三丸、神祐丸は港内に繋留してあった。その頃前島方面の上空では数百の飛行機が乱舞してゐたが間もなく八十米の上空に四機編隊の銀翼がみられ異様な爆音に不安を抱きながら眺めていると飛行機は機首を下げて底空すると同時にダダ、、と機銃掃射を始めた。

コクヨ 243

はじめて敵機の空襲を知り村民は上を下への大混乱に陥った。大人は陣地作業のため留守であり、老人は幼児をかこえ、敵負は学童の手を引き右往左往待避に長時間を要した。敵機の空襲は益々猛烈を極め機銃掃射と共に小型爆弾が投下され何回となく波状空襲が繰り返えされた。

嘉豊丸は東海岸で飼料採捕中、爆沈され機関長古波蔵欽彦氏は戦死し、他の乗組員はかろうじて生命を得た。源丸、神祐丸は港内に於いてジ炎上沈没し軍用船（えびす丸）も港内待避中爆破され、戦死者二名を出した。村営航路嘉進丸は軍需物資輸送久米島からの帰途、渡名喜島沖合で空襲を受け轟沈され、機関長金城連平事務長、小銃賀明の命を奪った。船長古波蔵良秀は三日漂流の後渡名喜島へ上陸生還した。

金徳船を失った乗組員は翌日から陣地構築作業に従事すると同時に各島地に設けられた軍監視哨勤務につき日夜軍に協力した。

状況は日毎に悪化し島の東海岸には暗夜に乗じ接近浮上した敵潜水艦の姿が度々見受けられた。

今十月下旬、

今まで自家通勤で軍陣地作業に従事していた村民に防衛隊として七十九名の召集が下令された。兵舎には村の国民学校が充てられ初年兵勤務が続けられたが教練ではなく壕掘作業に従事し、昭和二十年の元日を兵舎で迎えた。

ヤイノ島陥落後状況は益々悪化し、沖縄部隊へ入隊する現役兵を送り出すにも困難を極めた。学童も卒業して軍に協力し、婦人会、青年団員も軍の炊事班に徴用された。その

須軍の防衛陣地及壕は大才完成し舟艇の待避壕も完成、海辺に至る枕木も敷設を終え舟艇百隻は桟橋の上に来せられ出撃の準備は全く完了した。

昭和二十年二月下旬渡名喜島の陣地構築は殆んど完成したが基地隊である鈴木部隊は整備中隊と通信隊の一部及赤松隊特幹隊を残し沖縄本土防衛のため島尻地区へ移駐した。それと共に水上勤務中隊と構成する朝鮮人軍夫三百二十名が楠原中尉を隊長として来島し、その任務についた。鈴木部隊移駐後は村出身の防衛隊員は赤松隊長の指揮下に属した。

今三月二十三日午前五時空襲警報が発令された。事態は悪化し朝八時からグラマン機の波状空襲が間断なく繰り返された。B二十九と思われる大型機の編隊が再三飛来し爆音は山谷にこだまし耳をつんざく凄じさである。午前八時半村役所都使局が犠牲となり続いて防衛隊の兵舎である国民学校の爆破炎上し部落も大半焼失した。伊野波診療所長外十名は村役所附近の壕で待避中重傷を負うた。

空襲は一時止んだ。住民は事前に構築してある谷間の待避所へと避難を急いだ。平素の防空訓練も実戦には全く駄目であった。明けて二十四日、二十五日も空襲は続いた美しき山河は火の海と化し、夜空を真赤に染めた。未年住みなれた故里も今は戦場と化したかと思えば涙すら出ない程であった。

今三月二十五日未明米軍は艦砲の援護射撃の下に阿嘉島に上陸を開始したが間もなく慶良間海峡に潜水艦を伴った艦隊が侵入し何隻かの日本軍を見くびったかの如く悠々と投錨し

渡加敷陣地を砲裏し、山谷や部落はさたこく間に昔日の面影を止めざる焼土と化した。午后十一時、赤松隊長は特幹隊員に出裏準備の命令を発した。

夜空に敵艦砲の落下もものかわと防衛隊七十余名、男子青年団員一〇〇名、壮年団員三〇名、婦人会四〇名が軍に協力、舟艇百隻は待避壕より引き出され二十六日午前四時、渡加志久・阿波連の海辺に勇姿を揃えた。我の早い元気旺盛な特幹隊員は勇躍乗船しエンデンの音も高々と敵艦裏池に心を躍らせて出裏の命令を今か〳〵と待っていた。

防衛隊員新城信平上等兵以下八名は桂関銃をかこえ援護射裏の陣地についた。東の空は白みつゝあり出裏の杭を失つゝありながら赤松隊長は出裏命令を下さず壕の奥に待避し戦斗意識を全く失っていた。

百隻の舟艇は出裏の勇姿を揃えたまゝ夜明けとなり敵グラマン機の偵察に会った。隊長赤松大尉は何を考えてか、或は気が狂ったのか、全舟艇破壊を命令した。特幹隊員は呆然としていたが、上官の命令に抗するるも出来ず既に出裏の杭は失したるため、隊員は涙を呑んで舟艇の破壊を実施した。

舟艇を失った特幹隊員は本来の任務を全く捨てかねて調査済の西山の奥深く待避し赤松隊の生き伸び作戦が始つた。陸士出の大尉赤松は完全に卑怯者の汚名を着せられた。

船舶団長三宅少佐も座間味島を抜け出し赤松大尉と行動を共にした。

今三月二十六日敵は海空援護射裏の下に渡加志久・阿波連より上陸を開始した。が赤松隊は応戦の意志は勿論

武器、弾薬を放棄し隊長以下全將兵の生を延び作戰
が西山陣地に於て始められ敵は完全にこの島を無血占領した
今三月二十七日夕刻駐在巡査里見順を通じ住民は一人
残らず西山の軍陣地北方の盆地に集合せよとの赤松隊長の
命令が伝達された。その夜は物凄い豪雨であった。米軍の
上陸は住民に生命に安全な場所を求めしめ、ひたすらに頼
るは赤松隊のみである。ハブの棲む真暗な山道を猛雨と戰ひ
つゝ子を持つ親は背に嬰児を負い三つ児の手を引き、合羽の
代りに叭や茣蓙を被ひ老人の足を助けながら砲弾の中を航
到もなく西山へたどりついた。
雨の谷間は親子、兄弟を見失った人々の叫声がこだまし、全く
生地獄の感がある。西山の軍陣地へたどりついた住民は兵事
主任新城真順をして集結場所を連絡せしめた。

赤松隊長は意外にも住民は軍地陣外へ徹退せよとの命
令である。
今三月二十八日午前十時住民は涙を呑んで軍の指示に従
い軍陣地北方の盆地へ集った。その頃島を占領した米軍
は友軍陣地北方百米の高地に陣地を構え完全に包囲体
型を整え自走砲を以て赤松陣地に迫り遂に住民の待避
する盆地も砲撃を受けるに至った。名機は刻々に迫った。事こ
に至っては如何ともし難く全住民は皇国の萬才と日本の必勝
を祈り笑って死のうと悲壮な決意を固めた。かねて防衛
隊員に所持せしめられた手榴弾各々二個が唯一の頼りとなった。
各々親族が一かたまりになり一発の手榴弾に二、三十名が集った。
手榴弾がそこ、ここで発火したかと思うと轟然たる無気味な
音は谷間を埋め、瞬時にして老幼男女の肉は四散し、阿修羅

の如き阿鼻叫喚の地獄が展開された。死にそこなったものは
棍棒で頭を打ち合い、剃刀で自らの頸部を切り、鍬で親しい
者の頭をたたき割る等せにもあそろ、情景が繰り拡げられ
谷川の清水は血の流れと化した。一瞬にして三二九人の生命を奪
った。その憎みの血地を村民は今なお玉砕場と呼んでいる。
手榴弾不発で死をまぬかれた者は軍陣地へと押しよせた。
赤松隊長は壕の入口に立ちはだかり軍の壕へ入ってはいけない
連に軍陣地を去れと厳しく構え住民を駆逐つけた。
住民はすごごと軍陣地東方の盆地に集り一夜を明した。
翌三月九日米軍の迫撃砲は執拗にも集民待避の盆地へ飛
来し住民三十二名の命を奪い去り防衛隊数名の戦死者を
出した。
翌三月一日米軍は赤松隊の実力を見くびったか夜半島を撤
退した。空襲も止み、生き延びた住民は張りつめた気力を失
い五日間の空腹に耐え(病者の如くさまよい歩む足どりもふら
くと浮いていた。死場所を失った住民は迷い歩いた揚句僅
かな食糧を残して置いたもとの避難地忍舟河原へ集った。
赤松隊は持久態勢に入り食糧確保に奔走した。
間もなく赤松隊長からの命令が伝達された。我々軍隊は島に
残って凡ゆる食糧を確保し持久態勢を敷く上陸軍と一
戦を交えねばならぬ、事態はこの島に住むすべての人間に死
を要求していると主張し住民に家畜屠殺禁止の隊長命令
が出された違反者は銃殺という厳しい不達である。直ちに住民
監視の六の哨線が設けられヨヲ里少尉がその任についた。
住民の座間味盛松にスパイの嫌疑をかけ無実の罪におとし
入れ斬り殺したのもヨヲ里少尉である。

亦家族の全部を失って山をさまよい歩く古波蔵樹を之敵に通ずる恐れありと高橋伍長の軍刀にかけ三等住民に対する残虐行為がはじまった。

海峡には敵飛行艇百五十隻が常駐、駆逐艦十数隻、小型空母等が周辺に停泊していた。その他艦船を含む船舶の数は三〇〇隻を下ったことはない。

時々友軍特攻隊の攻撃もあったが敵対空砲火には抗し難く火を吐き海中に落下する尊い姿も見られた。

今四月下旬頃から軍民共に飢饉にひんし、一粒鉄の切干と野草を混じた代用食で露命をつないだ。

元気の者は監視の眼を逃れて島の各所から一粒鉄を集めた。

生き残った防衛隊員は軍の命により防衛隊長屋比久孟祥の指揮で軍の食糧獲得に努力した。

今五月初旬軍は遂に住民の保有している僅かな非常食糧の供出を強要し朝鮮人軍夫をして食糧を徴集せしめた。

住民は急激に老幼男女の栄養失調が続出し、生き延びて無甲斐を感ずる者もあった。気力ある者は夜間海岸に出で、米艦船から捨てられた肉切れや果物の漂流物を探し求めて食糧の足しにした。座間味島を逃れて米松火尉と行動を共にした三名の仲間は危険の多いこの島を脱出し沖縄本島へ抜け出すことを考え、絶えず機会をねらっていた。防衛隊員の中から刳舟に経験のある者の調査が行われた。この時の白羽の矢が防衛隊員小嶺賀牛、玉城定夫の両名に当った。本人達は希望する所でなかったが軍命であれば致シ方なく決死行の意を固めた。

刳舟は三〇〇ヤード外三名の軍人を乗せ潜水の糸満漁夫

二名と共に渡名敷港を出発した。
静かな海峡を敵艦艇の監視網をくぐり四哩の海路を見事前島部落へ辿り着いた。
前島北方海岸に刳舟をかくし上陸して見ると住民の姿は見受けられない。その夜か沖縄本島への砲声は寸時も止まぬ照明弾の合間に砲声は十六哩の海をこえて耳をつんざく有様である。
夜は明けて書の沖縄本島を望めば無事目的を達するこは到底望めない。然し少佐は萬難を排して決行せようことである。宵暗と共に前島を出発したが掃海艇の敵言式厳しく二回三回と失敗を繰り返し命からく引返した。鈴木少佐は舟長小頭賀中を呼び出し言葉厳しくなじった。小頭は慎重を期とねば目的達成はおぼつかないと答へると少佐は教員

し単刀を握って睨んでいる。切るなら切れと前に迫ると少佐は何を考えてか平静に返った。今ここで切っては勿論目的達成が出来ないことを知ったのであろう。潜ぎ手は渡れ切って精杯だった。遂に最後の決死行に意を決し再び前島を後にした。輻輳する艦船の横腹を手操りつゝスクリューの波に巻込まれながら遂に神山島北方へ出た。暗夜に乗じて那覇へ向けたが掃海厳しく接岸不能である。合議の上船首を糸満港へ向けた。東天は既に夜明けを知らせつゝあり焦慮に力漕し糸満港は目前に迫った。夜明けにあせりながら必死に力漕し遂に糸満港についた。一人の負傷者もない全員無事を喜び合う涙も忘れて真玉橋の部隊本部へと急ぐ。
今五月初旬米軍は再び渡名敷を占領した。赤松隊へ備へて各高地に砲陣地が構築された。間もなく伊江島住民が渡名

敷部落へ移され、米軍の保護下で收容された。赤松隊は極度に食糧欠乏し、若い下士官や將校は夜間切り込みと称して米軍食糧集積所を襲い食糧、煙草等を確保する様になった。

そのために米軍は各要所に地雷を施設した。鉄、小松原両方尉はその犠牲となった。

伊江島住民は米軍の保護を受けつゝ渡嘉敷部落の焼け残った家屋で生活していた。

米軍の要求により伊江島住民から選ばれた若き青年男女六名が赤松隊へ派遣された。それは戦争が既に日本の不利であり降伏することが最も賢明な策であることを伝えるためであったが赤松隊長は頑固として聞き入れず六名の者を斬殺した。赤集団目決に重傷を負い、米軍に收容された十六才の少年小嶺武則（金城章次郎の両名）

米軍の沿海を受け、ようやく恢復したので米軍の指示に従い渡嘉敷住民への連絡のため避難地へ送けられた。目的は住民へ早く下山する様伝えるためであったが途中赤松隊の將士は二人を捕へ米軍に通じた理由のもとに処刑した。

渡嘉敷小学校訓導大城徳安氏は海敵に通ずるあやしみありと斬首された。かくて住民は日々欠乏する食糧と赤松隊の恐喝盗々人たばるのみであった。食うに糧なく下山に方途なく栄養失調は続出する有様である。

飢餓と戰いつゝ六月、七月の二ヶ月を過ごし八月を迎えたが食糧は欠乏の極に達し住民は死の寸前にさらされた。

八月十二日、手榴弾で自決場で妻を失い幼児二人を抱へた郵便局長徳平奇雄氏は長女を背負い、長男の手を引き住民十五名と共に食を求めて山谷を移動中、米軍の潜伏斥候四十数名に包囲され、

（十三行）

拉致された。これが住民下山の第一号となった。

今八月十五日米軍機から赤松隊陣地へビラが撒かれた。ポツダム宣言の要旨が述べられ、降伏は矢つき刀折れたる者のとるべき賢明な途だと勧告してあった。住民は集団投降の意を固め代表を選んで村長古波蔵惟好氏と相談した。村長も民意の趨むく所止むなくこれを許し住民は八月十五日迄に殆んど下山した。

今八月十六日防衛隊員と残った一部住民が下山したが赤松隊は依然として投降せず米軍の指示により渡加敷住民の中から軍使として赤ずこになり、新垣重吉、古波蔵利惟、与那嶺徳、大城牛の四名が選ばれた。軍使としての心得勿論赤松隊への投降勧告であるが一旦見付かれば死を覚悟せねばならない。新垣、古波蔵は軍隊生活の経験あるため、勧告文を木の枝に縛り付け密に任を果した。与那嶺、大城の両名は要領得ずして、赤松隊に捕えられ即座に切り捨てられた。

今八月十八日赤松隊知念副官が軍使として米軍に投降の交渉に当った。今八月十九日赤松隊長、知念副官、外将校一名が米軍本部へ到着、渡加敷小学校校庭に於て武装を解除され降伏文に調印した。次いで西村大尉の率いた赤松隊将兵は戦死した戦友の遺骨を先頭に二十二日渡加敷校々庭に集合し武装を解除され間もなく沖縄本島へと出発した。

総べての力を結集しあらゆる食糧を確保し持久態勢を整え米軍と一戦を交へ、皇国のために全員玉砕渡加敷島に屍を曝すと豪語した赤松隊も米軍の鉄量には抗すべくもなく牧牛の如く連れ去られたかと思ふと一掬の涙を催すものがあった。

斯くして本島作戦と切り離された島の戦線は独特の様相と経路を辿りつゝ沖縄本島の降伏に遅れること一ヶ月昭和二十年八月二十二日その幕を閉じた。

（十三頁）

最後に特筆すべきは三月二十七日渡茄志久道路上で米軍と遭遇し、激戦の後、伊勢山山頂で護国の花と散った佐藤小隊の一事である。